

青爪の魔女

iambos

第一章

青爪の魔女

1、

潮を含んだ風が、女の黒い衣の裾をはためかせる。

女は、石造りの橋の上に佇んでいた。おりしも街が明け方のうす青い闇に染まる頃である。石造りの広い橋には人足たちがせわしなく行き交い、橋の向こう側に広がる波止場にやってきた船から、たくさんの積荷を降ろして市場へと運んでいく。ベラ、イロス、グランドリクー一十をくだらぬ港から来た船は、明け方の光の中で黒い塊となって波止場に繋がれていた。外国船によって港にもたらされた積荷は、荷車に山と積まれた野菜や魚籠と一緒に、新市街の市場へと運ばれていく。

大都市ティリスは、決して早起きの街ではない。だが、この港と〈青銅門〉の狭間に広がる新市街だけは違っていた。まだ太陽が石灰質の壁を緋色とオレンジに染め上げる前から、水夫や人足たち、商売人たちが街に溢れかえる。彼らはこの街という身体をめぐる血液のようにせわしなく行き交い、取引をし、悪態をついた。

女は、橋の真中の欄干に身を預けて、行き交う人々を眺めていた。

黒髪碧眼の女であった。弓型の細い眉の下に輝く眼の青さに、道行く人々は時折驚いて彼女に視線をやる。そして、またあっと驚く。

橋の欄干で咆哮する獅子の浮き彫りを撫ぜる女の爪は、瑠璃のように鮮やかな青さをしていた。

女は人々に背を向け、橋の下に流れる運河の、濁った緑の流れを見下ろした。

橋のたもとで店支度をする住民たちは、ふと不安になった。

もとより、数多くの橋が存在するティリスでは、身投げもまた多いのである。

だが不思議と、女の髪のように長い緑の藻の絡んだ水死者が、運河の濁った水から揚がることは少なかった。

人々はそれを、海水と河の水の交わるこの運河に繁殖した生き物や藻の類が、水漬く屍を喰らい絡め取ってしまうからとも、あるいはこのあたりの海に潜むもっと恐るべきもの、人とも魚ともつかぬ者どもが、水死者を跡形もなく喰らいつくしてしまうからとも噂した。

だが運河に繁殖した生物にも、海に潜む怪物にも、証拠があるわけではない。

女はしなやかな身のこなしで、橋の手摺りの上に立った。海から吹きつける風が、女の黒い、粗末な衣装を翼のようにはためかせた。

ちょうど橋の袂の店で茄子を籠に載せていた八百屋が、危ないと声をかけようとして近づいた。

女は、跳んだ。

女の細い身体が、美しい弧を描いて空中に舞った。白い腕や脛があらわになる。その堂々とした振る舞いに、居合わせた者は皆息を呑んだ。街の一角に、不意に静寂が訪れる。

声を掛ける間もなく、女は無造作に落ちていった。人ひとりが水に落ちる、大きな水音が轟いた。鏡のように静かだった運河の緑の水面に、大きな白い水柱が立った。

人々は、顔を見合わせた。運河の波紋がようやく落ち着き、濁った緑の上にくらかの白い水泡が残るばかりになった頃、彼らはようやく女が河に身を投げたのだと認識した。

「身投げだ！ 女が身投げしたぞ！」

誰かの声が静寂を打ち破り、人々の耳に一斉に街の音が甦った。橋にかけよる者、噂しあう者、ぽかんと開けた口を閉じて仕事に向かう者。人々は蜂をつついたような大騒ぎになった。

八百屋たちは橋の欄干から身を乗り出して、女の落ちた運河の面を眺めた。息が出来なくてもがき苦しむだろうに、気泡ひとつ、女の黒い衣装ひとつ、浮き上がってはこない。

はて――。

八百屋は不思議に思った。まるで、さっき身投げしたはずの女は、最初から存在していなかったかようだった。身体も、衣装も、帯のひとつ、息のひとつさえ運河の濁った水の上からは、何も発見できなかった。幻だったとも思えたが、それにしてもあまりに生々しすぎる幻であった。

あるいは、運河の底に潜む何者かの貪婪な口に、もがき苦しむ間もなく喰われてしまったのか。

運河の水だけが、何事もなかったかのように静かにたゆたっていた。

2、

「ということが、今朝あったらしいんですが」

昼下がりであった。大都市ティリスの一角、古本や骨董を商う店が多く営まれる〈古物通り〉も、今は暑さを避けてほとんど人通りがない。その〈古物通り〉で古本屋を営むラバンはひととおり、馴染みの客に聞かされた事件のあらましを語ると、振舞われた冷たい茶を一口啜った。

ラバンの正面には、一人の男が座っていた。何色かわからない夏用のローブを着て、のんびりと片肘をテーブルについて幾分だらしなく腰掛けている。暇で暇で仕方がない、とでも言いたげな姿である。この地域では平凡な組み合わせである黒髪と黒い瞳に加えて、その穏やかそうに見える顔立ちは、それほど若くもなければ年老いているわけでもなく、全体的に掴み所のない印象のある男だった。

唯一彼のこの町の住人の平均から外れている特徴と言え、ティリスの街角で働いている人々よりも日焼けしていないその肌である。と言っても彼の場合、白い肌というよりも、日ごろから働きもせず家の中にいるばかりであろうというような、日に焼けていないというだけの色であった。

彼もラバンも、古びた木の椅子に腰掛け、ラバンの営む古本屋の軒先に出した店台をテーブル代わりに、美しい硝子の器を並べて茶を飲んでいた。軒先には日除けの天幕が張られ、午後のすさまじい日差しを避けて涼しく過ごせるようになっていた。

男は、心むと頷くとまた茶を啜った。町中で噂になっているこの話を聞いてこの男がどう思ったのか、ラバンには定かではなかった。

しかし、それも普段通りのことである。それほど表情豊かな男というわけでもない。時折ラバンは、この男が何を考えているのか皆目検討もつかないことがあった。

男は、ラバンの店の隣の骨董屋であった。名をアルマロスという。ラバンは彼の年齢を尋ねたことはないが、せいぜい自分より十かそこら上の、三十半ばほどであろうと踏んでいた。

ラバンは、差し込んでくる日光を売り物の書物に当たらせまいと、天幕を引っ張った。外を眺めると、焼けつくような街には人ひとり、どこからともなくティリスの裏路地に集まってくるような痩せこけた野良犬一匹見当たらなかった。商人、水夫、その他ティリスを訪れる外国人もまた数知れなかったが、彼らもまた涼しい商館の中庭で休んでいるか、あるいは影涼しい木陰に座り込んでいるか、波止場に立ち並ぶ水夫相手の店に入り浸っているのか、影も形もない。

今日のティリスは、うだるような暑さであった。

生粋のティリス育ちで、暑さには慣れていないはずのラバンでさえ、脳が煮えたぎって、身体の穴という穴から流れ落ちそうに感じるくらいの暑さだった。わざわざこんな時間に客が来るはずもあるまいと、店舗の二階にある自室に行って、綿の詰まったクッションを枕に午睡をとっても

よいはずだった。

ラバンがそうすることなく店先の椅子にただつくねんと座り、あるいは売り物の本に陽が当たっていないかと気にするのは、ひとえに彼の生真面目さのためであった。古本屋は若い彼を置いて早くに死んでしまった父親から譲り受けたものだったが、彼の気性には合っていたらしい。

よいことだ、と彼は思っていた。この店は父が彼に与えてくれた、最大の贈り物だった。

アルマロスに眼をやると、彼は脇に張り出した店台に置かれた本を勝手に引き抜いては、自分の目の前にその革張りの背を積みあげ、ぱらぱらと中表紙を捲りあげていた。

「暇なんですか、アルマロス」

「それはもう」

アルマロスは鷹揚に頷いた。彼も一応骨董屋を経営している身であるはずだが、客がいつ来てもいいように店を管理しておこう、などという心がけは微塵も感じないようだった。

「でも店くらいは、開けておいたほうがいいと思いますけどね」

ラバンはそう言って、アルマロスが背にした方向を指差した。彼らと目と鼻の先にあるアルマロスの骨董屋の扉はがっちりと閉ざされ、普段は役にも立たぬがらくたのおかれた軒先は、きれいに片付けられていた。

アルマロスは肩をすくめた。

「いいんだ。どうせ、今日は客は来ないだろう」

「そういうことを言っているから、ますます客が来なくなるんですよ」

「それならそれでいいさ。楽でいい」

余計なお節介になると思いつつも、ラバンはため息をついた。

「だからいつまでも貧乏なんですよ。借金なんて、してないですよね？」

「外聞の悪いことをいうなあ。金がないのは君のところで本を買ってるからだよ。本は高価くてね」

「それが言い訳になるとは思ってますか？」

「やれやれ」

アルマロスはそれだけ呟くと、それきりまた手元に視線を戻した。どうやら言い負かしたようだ、とラバンは考えた。背後にある自らの骨董屋には、ちらりとも目をくれない。左手では、ほぼ意識もないままに空になった茶器を長い指でくるくるともてあそんでいた。

よほど熱心に読書をしているらしいとラバンは思った。

アルマロスはほぼ毎日のように、自らの骨董屋の隣にある、ラバンの店にやってきては、店台の前に勝手に椅子を持ちこんで本を読んでいた。入り浸っていると言ってもいい。隣の骨董屋から茶器を持ちこんでラバンに香り高い茶を振舞うのは、アルマロスも少しはラバンに悪いと思っているからだろうか。

売り物の本を読まれているのではあったが、ラバンにはなんとなく、それを咎める気にはなれなかった。アルマロスは無類の本好きであったし、それになにより、ラバンの店の一番の常連でもある。

だがそれだけではなく、アルマロスは老人だらけの〈古物通り〉の店主の中では、ラバンともしっかり年齢が近く、親しみやすい相手でもあった。古本屋という慣れない商売をはじめるとあ

って、ラバンはアルマロスに色々世話になっていた。気性の点でも、それなりに合っているのではないかとラバンは思っていた。

そのようなわけで、ラバンがこの古本屋を父から受け継いで以来、二人は茶を飲み親しく言葉を交わす仲だったのである。

ラバンはアルマロスの前に積まれた本を眺めた。『アリマク王宮の食卓と宮廷料理』、『アドン神話小論文集』、『深海の水妖たち』。ラバンの店は古本屋と言いつつ、船に積まれて絹や香料と共に港にやって来た貴重な外国の書籍から、最近出版されたティリスで売れ筋の小冊子、イロス語、アクロ語の本、古びた虫食いだらけの写本まで、雑多な新本古本が入り混じった品揃えだった。

宮廷料理の本なんて、アルマロスも妙なものを読む男だ。彼は内心そう思った。ラバンはそれよりも、一昨日仕入れたばかりの『公国の歴史と地理』のほうが面白そうだと思っていたが、年上でなおかつ彼には及びもつかぬくらい知識の豊富なアルマロスに、本の読み方の指図をするわけにもいくまい。

「何を読んでいますか？」

アルマロスは、臙脂色の革表紙に古風な金文字で、『深海の水妖たち』という題名の付けられた本をひらひらと手で振ってみせた。

「この本によれば、このティリス湾の海深くには、人とも魚ともつかぬ生き物がいるらしい。彼らは高い知性を持ち、海底に都市を築いているとか」

「聞いたことのない話ですね」

ラバンはあまりの胡散臭さに眉をひそめた。

「本にそう書いてあるというだけの話だ。で、彼らは魔術を扱い、陸に上がって人間と交わりその血を混ぜることも出来る。ティリス湾だけではなく、もっと遠くの大洋にも数多く暮らしているそうだ」

「信じているんですか、そんな話を」

「さて、ね」

ラバンが魔術と聞いて思わず苦い口調でそう訊くと、アルマロスは肩をすくめて言葉を濁した。だが口許には心なしか薄笑いが浮かんでいる。

アルマロスの周囲には、さまざまな憶測が飛び交っていた。

たとえば、彼が骨董ばかりではなく、魔術のために扱われる品々をこっそり商っているだとか、あるいは彼のもとを訪れる客の中には、彼に公には禁止されているはずの魔術の依頼をする者もいるという話が、この〈古物通り〉の裏ではまことしやかに囁かれていた。そうでなければ、あんなに商売気のない経営で、骨董屋がやっていけるはずがないと。

こんな話がある。

深夜、ある男が〈古物通り〉を歩いていた。

文目も分からぬ深い闇の中である。むろん、こんな夜更けに店を開いている本屋もない。

男は、盛り場でしたたか酒を飲んでから、〈迷宮地区〉の粗末な住居に戻る途中であった。酔

って気が大きくなったのか、舗装された大通りではなく、あえてこの細い道を選んで暗闇のなか、灯火一つを手に吊るして大股で歩いていた。

いつの頃からだろうか。

ひた、ひた。

男の背後から小さな足音のようなものが聞こえてきた。

足音というよりも、むしろもっと湿り気を帯びた音である。何か柔らかいものを、引きずるような音とも思えた。

男の酔いは、いっぺんに醒めた。

後ろに何かがいる。

男は決して後ろを振り向いてはいけない気がして、大股で〈古物通り〉を通り抜けようとした。この通りさえ抜けて大通りに戻れば、無事でいられるのではないか。訳もなくそう考えた男は、心臓を早鐘のように脈打たせながら、灯火が風で消えぬくらいの速さで早足になった。

音は、変わらず彼の背後にぴったりとくっつくように、纏わりついた。ひた、ひた、という足音の速さは変わらないのに、歩を速めた彼に楽に追いついているようだった。

男の心臓は、どきんと跳ねて裏返った。男は身も世もなく狂ったように走り出し、灯火が消えるのにも構わず、走って〈古物通り〉の出口までたどり着いた。大通りの、ちらほらと光る旅籠や酒場の灯火に、男はほっと息をついた。一体、自分は何に恐怖していたのだろうか。

今までの恐怖が莫迦莫迦しく思えてきた男は、ちらりと背後を振り返った。

背後には、黒々とした〈古物通り〉の路地の闇が広がっている。何の変哲もない、夜の路地のように見えた。男は今まで気付かなかったのだが、〈古物通り〉の店でただ一軒、アルマロスの骨董屋だけは、その扉の奥からかすかに明かりが漏れていた。男はほっとして、首を前に戻そうとした、そのときである。

闇の中で、何かが動いた。

今まで闇に紛れていた何かが、ゆるりと姿を変えて男の前に現れた。ねじれた身体。とぐろを巻くような角。半透明のぼんやりとした巨体の上には、小さな人間の顔にわずかに似ている頭が、ちょこんと載っていた。ぼうっとした光を放つ輪郭だけが、そこに明らかに何かがいることを示していた。

男は今度こそわっと声を上げて、怪物の前から逃げた。

足が痛くなるまで走り続け、ようよう家に帰ることのできた男は、一週間のあいだ、高熱に悩まされたという。

人々は、その怪物をアルマロスが、〈錬金術師通り〉の商売敵の魔術師に対して送ったものであると噂した。あるいは、それは彼の使い魔で、彼の留守中その家を守っているのだと。

ラバンはそのような噂を思い返しつつ、目の前で本を読むアルマロスを眺めた。彼は、アルマロスに関して囁かれるこの手の噂を信じたことはない。アルマロスに対しては、ラバンはときにその知識に畏敬の念を禁じえないということがあった。だが、夜の闇で我が物顔に振舞っているこの男を、想像することは到底出来なかった。

そんな甲斐性があるわけでもないだろう、というのが、ラバンの年上に対する評価としては少

々失礼な、アルマロスへの分析であった。

「魔術といえば、今朝身投げした女も魔女だと言われていたなあ」

「魔女？ 身元はもうわかっているのか？」

「いえ、まったくそんな話は出てませんが、あの青い爪、身投げをしたはずなのに全く遺体も遺品も発見されないところ、何かがおかしいじゃないですか」

「あるいは、それこそ深海の化け物のせいかもしれないな」

「ええっ？」

アルマロスはにやりと笑った。

「で、なぜ君は深海に化け物がいるという話は信じないのに、魔女という噂は信じるんだね」

「それは……」

ラバンは考え、たしかにそれは道理に合わないと思った。

「でも、そう噂した人の気持ちも判りますよ。身投げした女性はかなりの美人だったと言われてますから」

「だろうなあ」

単にラバンをからかっていただけらしいアルマロスは、何かに得心したように顎を撫でた。

「おそらく君の言う女性なら、一度、私の店に訪れたことがある」

ラバンは驚愕してアルマロスを凝視した。

「それで彼女に貰ったのが、君が今手に持っているその杯だ」

ラバンはますます驚愕して、自分の左手のうちにある硝子の器を見た。よくよく見れば、素晴らしい造形の器である。かなり高価なものなのではないだろうか？ 自分が手にするにはもったいないくらいだ、とラバンは慄いた。

だがなぜ、それを？

アルマロスは日差しの強い外の路地を眺めつつ、横目で驚愕しているラバンにちらりと目をやった。

「そう、彼女が私の店にやってきたのは、一昨日の夜だったかな……」

3、

窓の木枠からは、零れるような月の光が差し込んでいる。

アルマロスは寝台の上で目を覚ますと、まだ眠気の残る頭で呻いた。ずり落ちそうになっていた毛織のブランケットを肩まであげ、ごろりと転がってきつく身体に巻きつけようとする。

月ばかりが空に輝く、真夜中であった。

窓からは、涼しい夜風が吹きこんで青灰色のカーテンをひらひらと舞わせていた。昼の熱気が嘘のような、涼しすぎる風だった。

ふと、何かを感じて、アルマロスは耳を澄ました。

とんとん、と何かが堅いものを叩く音がかすかにする。軽やかな音だった。

とんとん、とんとん。

音はリズムカルに、一定の間隔を置いて響きつづけた。

アルマロスは、それがどうやら下から響いていることに気がついた。彼が寝ているのは、店舗の二階の寝室である。その下はむろん、彼が営んでいる骨董屋だった。簡素な木製のカウンターと、床から天井までぎっしりと物の詰まった陳列棚。

泥棒かと思ったが、おそらく違おうだろう、と彼は踏んだ。音は建物の内ではなく、外から響いている。

そうか、誰かが扉を叩いているのだ。

アルマロスはようやくそれに思い至って、寝台のそばに置いた茶色のスリッパを両足にひっかけると、さっと上着を着てぎしぎし軋む階段を降りた。

音は、天秤や筆、本などごちゃごちゃと物の並んだカウンターの向こう、背の低い戸口の扉から聞こえてきた。

こんな時間に、誰が来たのだろうかとアルマロスはいぶかしんだ。

「どなたですか」

彼が声を掛けると、とんとん、という音は已んだ。

「申し訳ありませんが、この時間、店は閉めているんですよ。私も眠らなくてはいけない身の上なので」

音の主は、何も言わなかった。しんしんとした沈黙が流れる。

「ですが、何か大切な御用がおありのようですから、どうぞ中にお入りください。遠慮はせずに、さ、どうぞ」

アルマロスがそう言って扉の鍵を開けても、外で何かが動く気配はしなかった。彼はカウンターのランプに火をともし、カウンター奥から椅子を取り出して前に置いた。古びた藍色のクッションの埃をはたくと、もうもうと埃が宙に舞い、ランプのゆらめく光に照らされた。

そのとき、ようやくがたがたと音をたてて扉が開いた。扉が開くとともに、眩しい銀の月光が

店の室内に溢れ出る。

その月光の下に、一人の女が立っていた。

年齢のころは、二十四、五ほどだろうか。黒っぽい粗末な衣装を着ていたが、月の淡い光に照らされたその顔は、青褪めた女神のようだった。涼やかな切れ長の目元が、ぞくぞくするほど色っぽい。

その眼は、はっとするほど深い蒼だった。

女は、重さを感じさせない歩みで狭い戸口を潜り抜けると、ふわっとアルマロスが用意した椅子に座った。アルマロスもまた、カウンターを挟んだ女の向かい側に椅子を持ってきて座った。

女の身体からは、濃やかな麝香の甘い香りがする。宮廷の貴婦人が、その宝石に彩られた白い柔肌から漂わせるような、かぐわしい匂いだった。

「このような夜分にお付き合いいただき、申し訳ありません……」

女は、鈴の転がるようなかすかな声で喋った。

「いえいえ、とんでもございません」

そう言いつつもアルマロスは、女を注意深く見つめていた。こんな深夜に訪れる女が、何か厄介なことを抱えていないはずがなかった。女が頭を下げると、胸元にさげた銀色の鎖がちかりと光った。

「本来ならば昼間の時間にお伺いできればよかったですのですが、事情がそれを許しませんでしたので……」

アルマロスはおもむろに手を揚げて、女の言葉を制した。

「それよりも、ここにこうしていらっしゃったからには、何か火急の用事がおありのはず。それを教えていただけませんか？　もし出来るのであれば、お力添えをいたしましょう」

「お礼申し上げますわ、アルマロスさん」

アルマロスはいつ女が何かとんでもないことを仕出かしてもいいようにと身構えつつ、その細面を眺めていた。だが彼女の顔に狂気の兆候はなく、むしろ何の表情も見られなかった。

「私の名はアイシャと申します。アルマロスさんは、雇われ船長のオレステスという男をご存知ですか？　こちらによく足を運んでいたと存じておりますが」

「ああ、それなら知っております。私の店の常連ですよ。買う側ではなく、売る側の」

アルマロスはオレステスの髭面を思い浮かべた。数年前から、この男はアルマロスの店に、様々なこまごまとした物を持ってきては、金に換えていた。商人たちの委託を得て、海の向こうの国々をめぐる船を操る船長であった彼は、寄港先で手に入れたがらくたが金になると知って、味を占めたのだろう。乱暴な男だが、いつもそれなりの物を持ってくる男だった。彼がどこからそんな品物を得ているのか、アルマロスは訊いたことがなかった。

「ええ、そのオレステスです。私は、彼の妻です。いえ、妻であった女でした……」

アイシャは心と目を伏せ、幽かなため息をついた。

「妻とは申しますが、私は最初から、それを望んでいたわけではないのです」

彼女はおもむろに、彼の妻となった経緯を話しはじめた。

第四章

4、

ティリス湾の南には、海が広がっている。

広大な大洋であった。東にはティリスとの交易さかんな国々があり、船乗りたちに富を約束していたが、横断するには港伝いに何ヶ月もかけて渡るか、そうでなければ青い大海に、幼児が戯れに珠玉を床に投げつけたように無造作に散らばっている、緑の島々を伝って航海しなければならなかった。

その島々のひとつに、マシュという部族が住んでいた。

マシュ族は、島が昔交易経路のひとつとして栄えていた頃は、商人として生計を立てていた。だがこの島を訪れる船がごくわずかなものになると、昔ながらの農耕や漁業に戻っていった。

この部族の長には、一人の娘がいた。

その名を、アイシャという。

マシュ族の女たちもまた、男たちと同様に鋤を持ち、あるいは海で貝を採り、家事をこなす、平凡な人々である。

しかし近隣の島々の住民たちは、マシュ族の女は魔術を扱うと噂していた。

嵐を起こす、家畜に伝染病を流行らせる、男を誘惑する、人を呪う。マシュ族の女には、様々な疑いがかけられていた。彼女たちの青い爪がその証拠だ、と噂する人々はそう主張した。マシュ族の女は、とある植物の染料で爪を青く染めていたからである。

そのようなわけで、マシュ族の島を訪れる船の数は、あるときからめっきりと減ってしまっていた。島の人々は、昔ながらの質素な自給自足の生活をしていた。

アイシャもまた、部族の長の娘とはいえ、このような貧しい暮らしのなかで娘時代を過ごしていたのである。

ある日、島のもう使われなくなった港に、一隻の船が錨を下ろした。

それはアイシャが御伽噺のように現実味のない、老人の昔話りのなかでのみ耳にしたことのある、ティリスという港から来た船だった。

船には数多くの水夫と、おびただしい積荷があった。島の人々はこの珍しい客に興奮して、どうかしてできるだけ多くの品物を得ようと、盛大な宴を開いた。部族長の一人娘であるアイシャもまた、宴の席に連なった。

篝火に照らされた広間で、アイシャは初めて島の外の人間を見た。長い航海を続けてきた水夫たちは、いかにも猛々しい顔をしていた。揺らめく炎は、彼らの顔に奇怪な影を投げかけて、いかにも怖ろしい顔立ちのように見せた。

アイシャは父の隣からそのように水夫を眺めていたが、水夫たちの間からもまた一對の輝きが、逆に彼女を食い入るように見上げていたということには、まだ気付かなかった。

宴の尽きた頃、男たちが食べ散らかした食器や酒壺を片付けたアイシャは、一人で広間の外に出た。父の家に戻って眠ろうとしたのである。涼しい夜の風が身体に当たってひんやりとした。

すると、暗闇の中、何かに腕を掴まれた。恐怖の声をあげようとする、口を大きな手で塞がれた。

「私です。ティリスから来た船長のオレステスです」

それは、島の外から来た船の船長だった。アイシャは今はじめて、船長の名前がオレステスだということを知った。

「私はあなたが好きだ。一目惚れをしてしまった。私と一緒に船に乗ってティリスに行き、そこで一緒に暮らさないか」

オレステスは低い、かすれた声でそう囁いた。

それはアイシャには、一度も想像もしたことの無い申し出だった。ティリス。それは御伽噺の国の都だった。貧しい島の娘にとっては、それは憧れることも難しい夢だった。

けれどもアイシャはためらった。彼女は父の一人娘であり、いずれは誰か島の男と結婚するはずだった。この男を信じていいものかどうかはわからなかった。そしてなにより、彼女には秘密があった。

マシュ族の女は、人々の噂どおり魔術めいた業が使えたのである。

それは彼らが噂するように、どんなものでも意のままに出来る力ではなかった。しかし、島の外の人間なら必ず妖術だと信じるような、不思議な力であった。たとえばアイシャは、翌日の天気を予知したり、死期の近い人間のことが何とはなしに判ることができた。家畜の傷を癒す薬草のことも知っていたし、注意深くない人間の目をくらすための呪いも、母親から教わっていた。

彼女の母親は、もしこのことが他の人間に知れたら、そのときこそ怖ろしいことになる、と彼女に告げた。もう商人たちの船は二度と来なくなるどころか、島を襲う人間も現れるかもしれないと。

アイシャは、今初めて会った髭だらけの男のためだけに、母の教えを捨て去ることはできなかった。男のことは好きでもなければどうしても嫌というほどでもなかったが、ただかすかな不快感だけがあった。彼女は男の腕を振り払って、急いで家の戸口に駆け込んだ。

次の日も、またその次の日も、オレステスはアイシャの姿を見かけるたびに愛を囁き、一緒に暮らさないかと提案し続けた。アイシャは耳を貸さなかった。そうしていれば、男もいつかは諦めるだろうと思っていた。

そしてついに翌朝、彼らの船が出港することが決まった夜のことであった。島の人々は船が去ってしまうことに落胆していたが、アイシャだけは胸のすっとする思いだった。彼女の心をかき乱す源が、ようやく立ち去ってくれるのだった。

アイシャは、粗末な藁を敷いた寝台の上に横たわっていた。

闇の中で、何かの物音がする。

彼女は目を覚ました。鼠の類が動いているわけではなさそうだった。アイシャは、嫌な予感に襲われた。

そのとき、彼女の視界を見知った髭面が覆った。

オレステス！

アイシャは叫ぼうとしたが、そのとき首筋に衝撃が走った。

意識が暗転する。

アイシャは、誰かの力強い腕に肩を掴まれているのを感じた。

男が彼女の肩を抱きかかえているのだ。アイシャの顔に、生ぬるい風が当たる。地面が不思議に揺れているのを感じた。苦い潮の匂いが、鼻の奥でつんとする。

彼女は目を開けた。

雲ひとつない青空だった。その青を背景にして、オレステスの顔が間近にあった。真剣な眼差しが、心配げな光を帯びている。

アイシャは、自分がオレステスの船の上にいることに気付いた。

彼女の意識が戻ったことを確認した彼は、堰を切った河のように話しはじめた。オレステスは、アイシャのことがどうしても諦めきれずに、彼女を父の家から攫ってきたのだと言った。最後の夜を祝う宴の酒に眠り薬を入れて、その隙に侵入したのだと言った。

アイシャはオレステスの腕の中で、両腕を伸ばした。指の先が、固い木の箱のようなものに当たる。

では、これは？ とアイシャは訊ねた。

オレステスは笑った。これは、婚礼の引き出物のようなものさ。あんたの父親の家から頂いてきた品だ。アイシャは納得した。彼らの島が交易で栄えていたのははるか昔のことだったが、部族長である父の家にはまだ、島の外からもたらされた美しい宝物が伝わっていた。

アイシャはオレステスの腕を振り払って立ち上がり、甲板の手摺りに凭れ掛かってちっぽけな緑の点になった島を眺めると、少し泣いた。けれどもいくら涙を流したところでその海の嵩が増え、船を沈ませることはないと判ると、彼女はオレステスの妻になることを承諾した。

ティリスはアイシャにとって、目もくらむような大都市だった。オレステスは彼女を妻として大切に扱い、絹のショール、金細工の頸飾りなど、何くれとなく贈り物を与えた。

オレステスが優しい夫だと知って、アイシャは彼の妻であるのも悪くないと思った。夫の髭面にも見慣れ、今となっては好ましいように思えた。彼女はティリスに来てしばしの間幸せな時を過ごした。島を離れた悲しみは、はるか過去のもののよう思えた。

けれども、島暮らしのアイシャは、ティリスのように人の大勢いる、悪臭を放った都市の片隅での暮らしにどうしても慣れることが出来なかった。炊事の仕方も、水の汲み方もわからないのでは、単なる役立たずの女であった。それに彼らの家のある〈迷宮地区〉の住民たちの粗野さは、貧しくとも一応は島の長の娘であったアイシャにとっては、決して親しみやすいものではなかった。

オレステスもまた、そんなアイシャを持て余しはじめた。

オレステスは家を空けることが多くなった。彼女は夫が仕事をしているものだと思っていたが、次第に彼が〈銀猫亭〉という酒場の酌婦に入れあげているという風の噂を耳にするようになった。女はさして美しいわけでもなく、また品性のあるわけでもなさそうだったが、ただ陽気で人懐こいところが、オレステスの心を捉えたのである。

アイシャは、夫が少しずつ、こっそり彼女の父の家から盗んできた品々を金に換えていることに気付いた。オレステスは航海の途中で勝手にアイシャを攫ってきたということもあり、勝手に

乱暴な男だという評判が立っていた。商人たちは、次第に彼を雇うことを敬遠するようになっていった。

ある日、オレステスは珍しく家に帰ってきた。板張りの床の上に寝転がって酒を飲んでいる夫の背中に向かって、アイシャは静かに語りかけた。

「私、島に帰りたいわ」

彼女はこのとき、こんなにも自分が夫のことを好いていたのだと気付いて戸惑った。金がないであるとか、家事をするのがお前の役目であるとか、どんな理由でもいいから否定して欲しかった。島のことは、もうほとんど思い出せなかった。

オレステスは振り向いた。奇妙なほどに熱のない目が、彼女をうつろに眺めていた。

「いいんじゃないか。お前がどうしても島が懐かしいと言うのなら、帰ってもいいんだぞ」

アイシャは、心の中に空虚が芽生えるのを感じた。

「だが、俺はこの街に残る。ここでしか生きてはいけないからな……」

オレステスは次の朝出かけると、それきり家に戻ることはなかった。

アイシャは話し終わると、アルマロスのほうに顔を向けた。

「本来ならば、一度島に戻って、全てを無かったことにしてしまえたらどんなによいことか、とも思うのです」

彼女はか細い声でそう言った。そして深いため息をついた。

「けれども、私は夫のことを、愛しもすれば憎みもしてしまいました。今この時ですら、あの男の心臓を、生きたまま生で啖らってしまいたいとさえ思うのです。もちろん、そんなことは出来ませんけれど」

アイシャは懐から、小さな天鷲絨の包みを取り出した。

「アルマロスさんは、魔術をお使いになるという噂をお聞きしております。初対面の方に、こんなことをお頼みするのもあさましいと思うのですが……夫に呪いをかける魔術を、教えてくださいませ。謝礼はお金ではできませんが、父の宝ならここに」

包みがするすると解かれると、その中には一對の硝子の杯が入っていた。月の光の中で、それは銀色に輝いて見えた。

「呪い、ですか」

「夫を殺すほどの呪いでなくてもいいのです。いえ、やはり殺したい。呪い殺してしまいたい」

伏し目がちにそう呟いたアイシャの顔から、一瞬凄まじい女の情念が滲み出た。だが彼女はすぐに平静を取り戻し、アルマロスのほうに向き直った。

「有害な黒い魔術の中には、その人が使っていたものを用いて掛ける呪いがあったと聞いています。私の家にあった夫の物は、夫があらかた持ち出してしまいましたけれど、夫があなたの店に持ち込んだ品物の中で、何か日用品の類があれば、それで呪いがかけられるはずですよ。貴方が呪いをかけずとも良い。私に品物と方法さえ教えていただければ、後は自分でします」

アイシャは、じりじりとアルマロスのほうににじり寄ってきた。彼女の細い両手が、彼の左手を祈るように包みこんだ。ひんやりとした白い柔らかな肌だった。それから香るむっとするような麝香の芳香に混じって、澱んだ水か、魚の腐ったような匂いが彼の鼻についた。彼は思わず顔

を避けた。

アルマロスは、何を馬鹿なことと言っ、彼女を正気に戻そうかと考えた。実際はそんな呪いのことなど、彼は今まで一度も聞いたことがなかったからである。しかしすぐに考えを改めて、真剣な目で彼女を見据えた。

「駄目です。その依頼はお引き受けすることができません。私は誰かを呪い殺したりはしませんよ。貴女にも、させはしない」

アルマロスは彼女の手を解いて、向こうに押しやりつつ断った。

「でしたら、……でしたら、その品物を夫との生活の形見として、私に分けてください。それでしたらいいでしょう？」

「いいえ、無理な相談です。どうせ貴女は、それを使って夫に呪いをかけるのでしょう。だって貴女はもう、その術を知っているのだから。知っていて、私からその品物を得ようとしたのでしょうか！？」

すると、アイシャの顔はみるみるうちに、鬼の形相のようになった。真っ赤な口がかっと開き、そこからぎざぎざに尖った歯が見えた。

「よく判ったな」

それは獣の唸りのような声だった。

アイシャは、先ほどとは打って変わった素早さでアルマロスに襲い掛かった。彼女の左手がさっと彼の頬をかすめる。よく見れば、その爪は獣のように鋭く尖っていた。アルマロスがかろうじてそれを避けると、女の青い爪は恐ろしい正確さで次々に彼の急所を狙った。

アルマロスは、アイシャの爪を必死でかわすと、ようようその手首を掴むことができた。両手首を左手で封じると、右手を女の首に回して締め上げる。女の細い身体が、どこから出てきたのかと不思議に思えうくらいの力で反り返った。二人は取っ組み合ったまま、ぐるぐると周囲の物にぶつかりつつ転げまわった。陳列棚からは陶製の壺、硝子の器、小さな銅製の天球儀などが盛大な音をたてて落ち、地面に当たって砕けた。

女もアルマロスも、肩で荒い息をついていた。アルマロスは力を振り絞って、今まで彼が座っていた木の椅子を女の頭に投げつけると、ぼきりと嫌な音がして椅子は壊れ、アイシャは崩れ落ちた。

アルマロスは立ち上がって、服についた埃を払った。辺りを見回すと、床一面に売り物だった陶器のかけらや硝子片が散乱している。これはひどいな、と彼はひとりごちた。

そのとき、倒れていたはずのアイシャの身体がゆらりと立ち上がった。

彼女はそのまま、すさまじい勢いで戸口に駆け寄り、扉を開けた。あっと思う間もなく、女は狭い戸口を潜って、外に出てしまった。

アルマロスは呆然と、それを見送るしかなかった。あれは一体何だったのだろうか？ 呪いは出鱈目だが、あの女が人間であるとは思えなかった。

扉の向こうから差し込む濡れたような月の光だけが、後に残っていた。

5、

アルマロスは、〈迷宮地区〉へと急いだ。

〈古物通り〉を一度大通りに出て突き進み、細工職人の商店と工房が立ち並ぶ〈金細工師通り〉に入って運河側の区画から、〈迷宮地区〉がはじまる。古い小さな建築物が、まるで狭い路地をさらに侵食していくように建っているのが、この地域の特徴だった。都市の中でも最も古くからある区画に属し、何百年にも渡る貧民たちの生活が吐き出したごみや汚れが、壁の石という石にこびりついている薄汚れた街であった。

アルマロスは、オレステスが入り浸っているという〈銀猫亭〉の戸口の前に立った。こんな夜更けまで営業をしている店は、酒場であってもそれほど多くはなかったので、窓にこぼれる明かりからすぐにそれとわかることができた。

扉を開けると、酒場独特のすえた匂いが彼の鼻についた。

思ったほど、酒場の中は明るくなかった。むしろ薄暗いと言えるだろう。アルマロスはきょろきょろと辺りを見回した。酔い潰れた男たち、奥の厨房とテーブルを行き来する女。そのなかに、彼は見知った顔を見つけた。

「オレステス！」

呼ばれた男は、彼の声が聞こえていないのか、じっと手に持った杯の酒を見つめて動こうとしなかった。アルマロスは男のそばに歩いていった。

「オレステス、私です。骨董屋のアルマロスです。至急、お話をさせていただきませんか」

男は凍りついたように、動かなかった。

「あら、だめよ」

カウンターの奥から、一人の女が声をかけてきた。アルマロスがそちらを振り向くと、化粧の濃い、それほど若くはない女がいて、こちらに笑いかけてきた。

「このひと、こうなったら動かないもの。何か用事でもあるの？」

「まあね」

アルマロスはオレステスの太い肩を揺さぶった。

「オレステス！ あなたの奥さんがここに来ませんでしたか？」

すると、オレステスの唇からくぐもった声が洩れた。

「……妻？ アイシャのことなら、俺はあいつと離縁したぞ」

「そのアイシャが、あなたを殺そうとしているんです！ 私のところにやってきて、夫に呪いをかけたいと訴えてきました。呪い自体は出鱈目なものでしたが、何を仕出かすか判りません。あの爪は恐ろしい武器ですから」

オレステスはまるで酔いが一気に醒めたように、ぱっと顔を上げてアルマロスを睨みつけた。今までの不養生のためか、あるいは恐怖にかられたのか、不潔な髭だらけの顔はいつになく蒼褪

めていた。

「本当か」

「もしかしたら、あなたの家に戻ったのかもしれませんが。場所を教えてください」

「あいつは、昔から嫉妬深い女だった」

オレステスは、のろのろとした口調で呟くように言った。

「なぜ、あいつのような魔女を島から連れてきたんだらうな、俺は」

アルマロスは肩をすくめた。

「おそらく、彼女もそう思ってますよ。どうして彼女があなたによって、こんなところに無理やり攫われなければならなかったのだらうとね」

彼はもっと辛辣な言葉を吐こうとしたが、オレステスの虚ろな色をした瞳を覗いて、彼は口をつぐんだ。

アルマロスは雇われ船長の背中を叩いた。

「急いで行きましょう。彼女はもう、あなたを殺す準備を終えてしまったかもしれません」

アルマロスとオレステスは、〈迷宮地区〉の奥まったところにあるオレステスの長屋へと向かった。

同じような通りがどこまでも続く〈迷宮地区〉は、ほとんど周囲の見通しのきかない地区である。開けた大通りや大きな広場も見えない路地をひた走っていると、本当に出口のない迷宮の中に迷い込んでしまったように思えた。

しかし、彼らはやがて、とある長屋の二階の一室の前にたどり着いた。

このみすばらしい扉の向こうが、オレステスとアイシャの暮らしていた住居だった。

扉を開けると、悲鳴のような軋みが鳴り響いた。男二人は恐る恐る暗い室内を、朽ちかけた板張りの床を踏みしめて奥へと向かった。

部屋の突き当たりの右隅に、寝台のようなものが置かれている。

その寝台には、何かが横たわっていた。

アルマロスは、寝台の脇に窓があることに気がついた。その窓が、簾のようなもので覆い隠されていた。

彼が手を伸ばして簾を取り外すと、大きな窓から明るい月光が降り注いだ。

そしてその明かりに照らされて、寝台の上にあるものの姿があらわになった。

それは、蒼褪めた女の身体だった。目を閉ざした美しい顔立ち。だらりと垂れ下がった腕の先の青い爪。かすかな麝香の匂い。

アイシャだった。

アイシャは、死んでいた。

アルマロスは彼女の屍の胸元に、なにか銀色のものが置かれているのを見つけた。それは銀色の鎖に繋がった、指先ほどに小さい金属板で、黒い奇怪な文様が刻まれていた。アルマロスは、それに見覚えがあった。アイシャが彼のもとを訪れたとき、首から提げていたものだ。

彼は禍々しい気配さえするその板を手を取った。

板に手を触れた瞬間、不思議なことが起こった。

白々とした光に照らされたアイシャの顔は、みるみるうちに萎んでいくようだった。青白い肌は土気色からどす黒く変色し、たちまちのうちに腐臭がし始める。

アルマロスのははとした。オレステスのほうを振り返ると、彼は青い顔でがたがたと震えていた。

「アイシャ、貴女はあのとき既に死んでいたのか……」

寝台の上にあるものはもう、蛆の湧いた屍でしかなかった。

6、

「明け方になると、私たちは人を遣って、アイシャの屍を丁重に火葬した。それがこの地方で行われる、呪われた死体を成仏させる方法だったからな」

アルマロスが話を終えると、二人の間にしばしの沈黙が訪れた。

街そのものが黙りこんでしまったように、彼らの周りには物音ひとつ聞こえない。

「哀れな女だな……」

やがて、ラバンが呟くようにぼそりと言った。

「そう思うか、ラバン」

「男のことなど放っておいて、逃げればよかったのになあ」

「そう出来ればよかったのだがね」

アルマロスは静かに言った。

「だが、それをするにはあまりに男のことを、想いすぎていたんだな……」

ラバンはため息をついた。頭の中で、重苦しいものが渦巻いている。

そう、女が死んだのは一昨日の夜で……。

一昨日の夜？

ラバンは違和感に気付いた。

ならばなぜ、今日の朝になって、そのアイシャらしき女が河から身を投げたのだ？

あるいは、それは亡霊だったのだろうか。

だがその屍は火葬の炎で焼かれたはずだ。今もなお地上を彷徨っているはずがない。

それとも――ラバンは薄気味悪いものを感じた。

「なぜ、そのアイシャが今日の朝、運河に身投げをしたと言われているんです？」

「そこだな、問題は」

アルマロスは肩をすくめた。

「今日の明け方のことだ。まだ暗い時間に、酒場でオレステスや私と話をした女が、私の店に血相を変えて駆け込んできた。あのとき私の名前を耳にして、店の場所を探り当てたんだらう。

彼女は、オレステスが大変だから来て欲しいと言った。私が彼女の後についてその住居まで行くと、そこの床にオレステスが、血を流して横たわっていた。

私が彼の身体を触ると、もう冷たくなっていた。おそらく即死だと思うな。おびただしい血が床一面に広がっていた。心臓を何か鋭いもので一突きされたいらしい」

ラバンは夏の暑い日差しが石畳に照りつけているのにもかかわらず、肝が冷えるのを感じた。

「それは、つまり……」

「アイシャは死んではいなかったということさ。寝台には別の死体を置いて、私たちが、それを彼女自身の死体だと勘違いするように仕向けたんだ。どうせ腐ってしまったら、誰の死体なのか

は判別がつかなくなるからね」

「でも、あなたは最初、間違いなく死体の顔を見て彼女だと思っていたんですよね。まだ腐っていない死体の顔を見て……」

「そうだ。この世の中には、たったわずかな時間だけ、他人に何かを何かと見間違えさせるような、そんな業があるんだよ。もちろん長時間見つめ続ければ必ず粗が出る。その程度の力しかない術なんだが……まあ、人によってはそれを魔術と呼ぶそうだがね」

「つまり、彼女はやはり魔女だったということですか」

ラバンは手の中にある硝子の器を、薄気味悪い気持ちで眺めた。この器にも、どんな毒が塗られてあるかわかったものではないと思うと、再びこの器に口をつけるのはためらわれた。

「そんなところだな」

アルマロスはラバンの逡巡を露ほどにも感じないらしく、茶を啜りながらそう答えた。

「つまり、彼女はまずオレステスに協力しそうな私のもとを訪れて、夫にかける呪いについて出任せの依頼をし、またわざとその目の前で死んでいるふりをして私たちを油断させた。呪いについて出鱈目な相談をしたというのも、私を混乱させるための罠だったんだろう。彼女が、本当に魔術を知っていると思わせないためのね。

そして、彼女がもうこの世のどこからもいなくなると私もオレステスも考えたところで、彼の寝込みを襲って殺した。あんなに鋭い爪と強い力を持っていたら、わざわざ魔術を使わなくても十分だろう。彼女が油断した彼のもとに行って心臓を一突きすれば、それでいい。彼女自身もそう踏んでいたはずだ。

そして事が済むと、彼女は運河から身を投げた。真相は、そんなところなんじゃないかな」

「結局、誰も救われなかったということか……」

ラバンは、何ともやりきれない気持ちだった。

「これ以外の結末は、ありえなかったんですか？」

「それはわからない。ただ、今回の件に関しては残念だと言うしかないな」

アルマロスは優しく言った。だがラバンにはその落ち着きが、ぞっとするほど冷たく感じられた。オレステスを助けられず、アイシャも死んでしまったのに、この男はどうしてこんなに穏やかでいられるのだろうか？

「アルマロス。僕は時々、あなたが冷たい人間だと思うことがあるんですが」

「そうかね。君が思うのなら、そうなんだろうなあ」

ラバンはアルマロスのそんな応えにもむっとして黙りこんだ。

「まあ、そう怒るな」

アルマロスは苦笑しながらラバンの器に茶を注いだ。

「怒ってるわけじゃないですよ。ただ、否定してもよかったのに」

ラバンは、その器に手をつけることなくアルマロスを睨んだ。骨董屋は首を傾げた。

「何を？」

「冷たい人間だって言われたら、否定くらいしたほうがいいと思いますよ」

「そうかねえ」

ラバンは、ため息をついた。この男に様々な欠点があることは知っていたが、加えてかなり偏

屈な人間であるらしい。

そのとき、アルマロスの肩越しに、ラバンは路地の角から一人の男の姿が現れるのを見た。

男はこちらに気付いたようだった。誰だろう、とラバンはいぶかしんだ。

男は、ずんずんと近づいてきた。髭面の大きな男だった。そしてアルマロスのすぐ後ろまでやってくると、彼の肩をぽんぽんと叩いた。

アルマロスは振り向いた。

「オレステス！ ずいぶん早いじゃないか！」

ラバンは驚愕した。オレステスは殺されたはずではなかったのだろうか。この髭面の男の容貌は、確かに話の中のオレステスに合致する。だがしかし……。

「あんたのおかげで命拾いしたからな、アルマロスさんよ。これから波止場で仕事なんだ。その前に寄っていこうと思ってな」

オレステスは、アルマロスに小さな青いものを渡した。そのまばゆい煌めきから、ラバンはそれが装飾品であるのあろうと考えた。

「約束どおり、これが謝礼だ。持ってけよ」

「ありがとうございます。いいんですか、こんな高価なものを」

「いいさ。あの女の持ち物は、気味が悪いから全て処分したかったんだ。これが最後のひとつだ」

オレステスは吐き捨てるように言った。

「では遠慮なく」

アルマロスがそれを懐に仕舞うのを見ると、ラバンは二人の男を交互に見ながら呟いた。

「一体、どうなっているんだ……？」

アルマロスはにっと笑った。

「いや、騙してすまなかった。実はオレステスが殺されたというのは、私たちがアイシャのために打った芝居だよ。

オレステスはもともと、アイシャが彼を殺そうとしていることを知っていたんだ。それで、私に相談を求めてきた。彼女が夫が、私に相談すると踏んだとおりにね。ただし、彼女よりもオレステスのほうが先手を打ったんだ。

私がアイシャの訪問を受けたあと、私はオレステスのもとに向かった。オレステスの家には死体があったが、私にはそれがすぐに、別人の屍であると判った。そこで私はオレステスに提案したんだ。彼女が死んだふりで私たちを騙そうとしているから、私たちも彼女の策にのったふりをしよう、とね。

つまりアイシャが誰かの死体を自分の死体だと勘違いさせたように、私たちもまた身代わりの人形で、彼女の目をごまかそうとしたのさ」

「そんなもので彼女の目をごまかせたんですか？」

「もちろん、そのままでは駄目だ。だが、アイシャに見せかけた遺体のそばに、こんなものが置いてあった」

アルマロスは懐から、何か小さな板を取り出してラバンに見せた。それはよく見ると、何か文

様の描かれた金属板のようだった。

「アイシャに似せた屍の胸元にあったものだ」

「まるで、何かの護符のようですね」

ラバンは気味悪げに言った。その禍々しい文様からは、明らかに黒魔術まがいの気配がした。「そう、たぶん、そんなものなんだろうな。おそらくこれは、人に現実ではなく見たい幻、見るだろうと思っている幻を見せるものなんだろう。アイシャもまたあの女の死体も、これによって我々の眼をごまかしていたんだ。私はそう判断して、実験してみることにした。私たちは騙されたふりをして死体を葬った後、あの酌婦の家にこれを首に掛けた人形を置いたんだ。オレステスはその間、都市の外に逃げていた」

アルマロスは、横目でちらりとオレステスに視線をやった。オレステスは頷いた。

「騙されてくれるかどうか不安だったが、見事成功したよ。アイシャはオレステスを殺したと思ひ込み、そして運河に身を投げた。私はそれをオレステスに知らせた」

「そういうことは、先に言ってくださいよ……」

ラバンは、まんまとアルマロスに騙されてしまった自分に落胆した。

「仕方ないさ。あまり表立って言える話じゃなかったんだ。本人が姿を現したから、本当のことを話したがね」

アルマロスの言葉に、ラバンはますます落胆した。もちろん、アルマロスにも様々な理由から秘密にしておかなければならない事柄はいくつもあるのであって、彼がラバンに対して常に真実を語ってくれると期待することは出来ない。しかし、それをこんなにも明らかなかたちで見せられてしまうと、少し落胆してしまうのだった。自分はまだ人間が出来ていないな、とラバンは思った。

「それに、もし失敗したらどうしたんです？ そんな行き当たりばったりな作戦、いつも成功するとは限らないでしょう」

ラバンがそう指摘すると、アルマロスは頬を指で搔きながら考え込む表情になった。

「実はこれ以外にもいくつか方法はあったんだが……まあ、これに関しては自信があったからね。骨董屋をやっていると、この手の品物に関する知識も増えるということさ。そういうことにしておいてくれ」

明らかにその場をごまかそうとしているアルマロスの言葉にラバンは疑いの目を向けたが、何も言わなかった。わざわざオレステスの前で、彼の行き当たりばったりさを責めるのも無益なことだった。

「これで全ては一件落着だな、アルマロス」

オレステスはとにもかくにも事は終わったというような晴れやかな顔で笑った。アルマロスの背を叩く。

「そうですね」

アルマロスも微笑した。いかにも一仕事終わった後という男二人に挟まれて、ラバンだけが、少し浮かぬ顔をしていた。

たしかに、恐ろしい殺人は起こらなかった。しかし、身を投げた女はどうなる？ 虐げられた女の悲しみは、いかにその手段が歪んだものであったとしても、虚しく消えてゆくべきものなの

だろうか？

ラバンの胸には、なんとなく納得のいかないしこりが残っていた。

「じゃあな」

オレステスはこれから港に行くと言って、二人に手を振ると、悠然とした足取りで〈古物通り〉のもと来た道を帰っていった。ラバンとアルマロスは、その背中を黙って見送った。

「これでよかったんですかね」

オレステスの背が路地の角を曲がって見えなくなると、ラバンはぼそりと呟いた。

アルマロスはラバンに視線を合わせた。

「ラバン、実のところはまだ、この事件は終わってはいないんだ」

アルマロスはそう言いつつ、懐からオレステスに貰った青い装飾品を取り出してラバンに見せた。

それは、瑠璃の髪飾りであった。吸い込まれそうなほど青い瑠璃の板が、細い銀の輪郭に縁取られている。平たい瑠璃の板には、素晴らしく精緻な浮き彫りが細工されていた。そこに刻まれていたものは、ラバンが一度も見たことのない、鱗のある蛸のような生き物だった。

「素晴らしい髪飾りだろう」

「たしかに、素晴らしい細工物だ。よくあの男が今まで売り払わずにいたものです」

「これを今から、元の持ち主に返してやろうと思うんだ」

え、とラバンが驚く前に、アルマロスは立ち上がった。

「場所はアイシャが身投げした運河の近くがいいかな。君も一緒に行くかね」

「え？ ええと、では行きます」

「よし、じゃあさっそく行こう。その前に、この本を買いたいんだが」

アルマロスはラバンに二冊の本を差し出した。

その表紙の題名には、一冊には『アリマク王宮の食卓と宮廷料理』、そしてもう一冊には『深海の水妖たち』と書かれていた。

アルマロスとラバンは、それぞれの店を閉めて大通りを歩いていた。太陽が雲に隠れて、さきほどよりもかなり涼しくなったのを見て、大通りには数多くの人々が繰り出している。

大通りの右手の建物の隙間からは、ちらちらと凝った造りの宮殿が見えた。それはティリスを治める大公の宮殿だった。迷宮とあだ名されるそれは、ティリスとは川を挟んだ土地に建てられていた。

「本にも書いてあったように、海の深くにはある生き物がいる」

アルマロスはラバンの横を歩きながら、おもむろにラバンにそう語りかけた。

「よく知能の低い怪物であると間違えられるが、実のところは違う。人間と同じくらい賢い生き物だ」

「そいつらが、海の底で都市を築いていると言うんですか」

「そうだな。だが、彼らは海底で一生ずっと過ごしているだけではないんだ。時々陸に上がっては人間と混血したりもする。そして彼ら混血児もまた、人ならぬ親とほぼ同じ姿をしている。すなわち、鱗の生えた、人とも魚ともつかぬ存在だ。本には書いてなかったが、彼らは生まれたときは人間と同じ姿をしているのだが、徐々に親と同じ姿になる……」

ラバンは馬鹿馬鹿しいと言って一笑に付そうとしたが、それはできなかった。アルマロスの語る言葉にはどこか抗いがたいような、聞かずにはいられない不思議な魅力と恐ろしさが備わっていた。

なぜ、アルマロスはこのようなことを知っているのだろうと、彼は不思議に思った。だがその理由を尋ねることは、どうしてだか躊躇われた。

アルマロスは、やはり噂どおり、魔術師なのだろうか。

さっきはあの護符を躊躇いなく使ったのは彼の考えのなさからだと思ったが、今考えれば、彼は最初から全てを知っていて、あの護符を使ったのかもしれない。

だがあの護符は、疑いなく黒魔術のものだろう。

もし彼がアルマロスに尋ねたら、彼は本当のことを教えてくれるのだろうか？ ラバンは首を振った。こういうことは、もう考えないほうがいい。少なくとも彼の知るかぎりでは、アルマロスは誰かを害するために魔術を使ったりはしていない。それでいいのではないか。

二人は旧市街と新市街を分ける〈青銅門〉を潜った。潮の匂いが鼻につく。港が近いのだ。

新市街には様々な品物の市場が、そこかしこにある。野菜市場には人参や玉葱、にんにくなどが籠に山と詰まっていた。魚屋の前では、女がものすごい形相で大きな天秤の皿に載せられた鯖を睨みつけている。

「それで彼らが、この運河の底にも潜んでいると？」

「まあそうだな。というよりも、彼らはどこにでもいるし、どこにでも姿を現す可能性がある」と

いうことだ。海は広いし、繋がっているからな。彼らがあえて淡水の川を遡るかどうかは知らないがね」

彼らは大通りをとある路地で曲がった。しばらく歩いていくと、目の前に運河が現れた。海水と上流から流れてきた汚水が混じりあい、何とも言えない匂いが彼らの鼻についた。

二人は、運河にかかる石橋のたもとで足を止めた。アルマロスは石の手摺りに手をかけると、そこから身を乗り出して運河の濁った水面を眺めた。

「彼らは大洋のどこにでもいる。そう、アイシャの島の近くにもいたはずだ。彼らは島の住民たちと混血し、住民たちに魔術をも教えた。島の女たちが魔術を使うと恐れられたのは、多分そのせいだろうな」

「そんな。どこにそんな証拠があるんです？」

ラバンがそう言うと、アルマロスは手摺りに手をかけたまま、彼のほうに向き直って応えた。「アイシャが私に襲いかかったとき見えたんだよ。彼女の首の後ろ、うなじの辺りは、薄い鱗で覆われていた。そして首筋には、鰓のようなものがあった」

その言葉は、ラバンには到底信じられないものだった。

「そんなこと、あるわけないでしょう。それにもしそんな存在がこの世に数多く存在するのだとしたら……」

「彼らは、知らないうちに我々の間で数を増やしていくだろうね。既に、このティリス湾や運河にも彼らは侵食している。この都市に彼ら〈深きものども〉の混血児が増えるのも、時間の問題かもしれない。アイシャがそのひとりだったように」

アルマロスの声は、ラバンの耳にはぞっとするほど冷たく響いた。ラバンは一瞬、アルマロスが実は人間とは似ても似つかない怪物であるかのように思えた。彼はぶるっと身を震わせた。

「何とかして、それを防ぐ手立てはないんですか？」

「根本的な解決策はないよ。どうやって、この都市に足を踏み入れる者全てのことを調べるんだい？ それよりひとつ良いことを教えてやろう。アイシャは、生きている」

「何ですって？」

「彼女はこの橋から運河に飛び込んだ。だが、彼女が水中を自在に泳ぎまわる〈深きものども〉の一員なら、どうして橋から落ちて溺れ死んだりするだろう？ 彼女は生きているよ。まだこのあたりを泳いでいるかもしれないな」

アルマロスはそう言うなり、懐に手を伸ばして瑠璃の髪飾りを掴むと、それを運河に向けて放り投げた。

髪飾りはきれいな青い弧をえがくと、濁った水面へと落ちていく。

ラバンはそんな馬鹿な、彼女が生きているはずがないとアルマロスに言おうとしたが、それを口にしかけてやめた。

運河の縁に濁った水面から白い腕がぬっと出て、落ちてきた髪飾りを受け止めたからである。

その手には、青い爪が生えていた。